論　壇

こどもとコロナ　逆境からの再起

沖縄県立南部医療センター・こども医療センター　小児感染症内科
張　　慶　哲

新型コロナウイルスが全世界を席巻している。一つの感染症によって、感染症への考え方が変わり、医療が変わり、社会が変わった。感染症に関わる医師としてこの巨大で無慈悲な変化をどのように捉えればよいか、思い悩む日々が続いている。

新型コロナウイルス感染症が小児に与える影響は過小評価されているように思う。成人、特に高齢者への影響が大きく直接的なせいで、こどもたちに関連する問題は隠れてしまっている。小児科医はこれらの問題に光を当てていかなければならない。

では、こどもたちに起きた変化とは具体的にどんなものがあるだろうか？手洗い･マスク･ステイホームなどにより、「感染症」の罹患者は激減した。小児科の受診者数は減り、予防接種や健診といった小児保健の根幹を支えるものでさえ、受診控えの影響を受けている。休校措置がこどもたちの心身に与えた影響も決して小さくない。

では、この変化は続くのだろうか？全世界で感染防御策が強化されたことで、「感染症」がこのまま減り続ける可能性はある。しかし、皮膚や腸管内の何十兆もの微生物とともに暮らしている私たちから、完全に微生物を排除することはできない。全ての感染症が減り続けるというのは少し極端なように思う。とはいえ感染症患者で溢れていた小児科外来は、様変わりするだろう。予防接種の役割はますます大きくなり、感染症に対抗する大きな武器で有り続ける。新型コロナウイルスワクチンを巡って、ワクチンに対する世論は再び大きな動きを見せるだろう。以前より世界的な懸念となっていたワクチン忌避（Vaccine hesitansy）への対応は、予防接種の専門家である小児科医の重要な役割になる。世界の変化を受けて、私たち小児科医も変わらなければならない。

小児科と感染症科、２つの立場から私個人がこれから取り組みたいことを３つ挙げさせていただく。１つ目は救急や災害診療部門と連携して、自院のみならず地域を守る視座を持つこと。新興感染症のパンデミックを通して、感染症部門は危機管理部門であることを痛感した。危機的状況でリーダーシップを発揮できる、ということが感染症医の重大な仕事となるだろう。２つ目は、ベクトルを外に向けること。受診者数が減るのであれば病院の中で患者を待っているだけでは、こどもたちを守ることは難しい。園・学校・児童デイ・公民館・産院など、こどもが生活する場を訪問したり、そこに向けて積極的に発信したりすることでより多くのこどもを守ることができるかもしれない。最後に、不変的に大切なものを引き続き大切にすること。抗菌薬の適正使用・薬剤耐性菌（AMR）の対策は以前より感染症関連の最重要課題であり、新型コロナウイルス対策と同様の世界的課題である。目先の出来事に囚われて、継続的な課題への対応が疎かになってはならない。2050年には薬剤耐性菌で亡くなる人が1000万人となり、がんで亡くなる人より多くなる、という推計も出ている。コロナ禍で身につけた基本的な感染対策の強化（特に手指衛生）や地域を守る視座を持つこと、リーダーシップを発揮することは全て、今後のAMR対策でも生きてくる。未来のこどもたちが、感染症から守られるように願いつつ、今日の一歩を踏み出し続けたい。